

私がお茶を点てる理由

東洋英和女学院中学部3年（東京都）

織田 愛梨

私が茶道部に入部したのは、ほとんどなし崩しの形だった。学校の方針で部活動は学校授業の一貫という体を成しており、何らかの部活には必ず入部しなければならなかった。だが、特段入りたい部活も興味のある部活もなかった私は、文芸部と迷った結果、部の人数が多い方が面白そうだ、という単純な理由で入部を決めた。

茶道部に入部した中学1年生は、私を含め3人いた。2人とは面識があり、学年内で馴染むのにはそれほど苦労しなかった。しかし、活動初日、私たちは大きな問題を認識させられた。1つは、コロナ禍であったことで、中1の初参加が6月下旬頃となったことにより、中1が新たに入部したという感覚が全員薄れていたこと。もう1つは、例年4月頃に行われる茶道についての大まかな説明が省かれていたことだった。そのため、用語すら怪しい私たちにとって、指示一つとってもわけが分からなかった。先輩方に伺えば教えてくださるが、そこにも壁があった。私たちは「建水」も「お点前」も「水指」も分からない。それでも1年以上茶道を続けていらっしゃる方にとっては、それは大した用語ではない。故に、知っている前提で話されても余計に分からなくなってしまふ。「建水とは何ですか」と訊きたかったが、ご迷惑にならないだろうかと妙な気を回してしまい、訊けずじまいになってしまう。部活のある火曜日は陰鬱な気持ちになり、失敗するのではないかと肝を冷やし、怖々と教室に向かう始末だった。

そんな中で、まるで狙ったかのように私に試練が訪れた。中1の他の2人が風邪などにより、学校を欠席したのである。それまでは何とか3人で気を回し、見よう見まねでやっていたのだが、1人になると途端に不安になった。部活は始まってからまだ片手ほどしか活動していないし、何をすればいいのか、今何をしているのか分からない。どうしたものかと頭を悩ませた。

ところが、そんな危機的状況にも、唯一の救いがあった。私は、自分1人という後先ない状況になると一転、一念発起するという性格だったのである。もう我武者羅になり、いちいち迷惑だ何だと気にしていられなかった。分からなければ先輩方に伺い、先生方にもお世話になった。その日だけで何度質問に質問を重ねたか分からない。そして驚いたことに、どなたも丁寧に教えてくださった。手を止めさせているにも拘わらず、快く説明してくださるその様子に、私は張り詰めていた緊張が解けるのを感じた。不意に、私の脳裏に「一座建立」という言葉がよぎった。これは昔、今はもう忘れてしまったある本の中に記載されていた言葉だった。亭主と客という立場ではないが、一体感を成すということ、私が先輩方や先生方にさせていただいた数々のことがそれにピタリと当てはまっていた。私はその時初めて、この部活に入って良かったと思った。

それがきっかけとなり、私は部活を楽しみに思うようになっていった。同学年の2人からはよく、「どうしてそんなに慣れているのか」と問われることがあった。「よく質問したから」と返した。すると今度は「どうしてそんなに質問できるのか」と返される。だがそれは言うまで

もない。あの時、多くの方々に助けていただいた経験があるからだ。

私は、あの窮地でたくさんの方々の温かさを感じたことを、今でもとても大切に覚えている。そしてそれは、茶道に於いて一番重要な心構えだと信じている。入りたての頃は多くの友人から入部理由を訊かれ、「和風が好きだから」と曖昧に濁していたが、今なら「『茶道部』が好きだから」と答えるだろう。

この空間、この雰囲気が好きだから、そしてそれを作る人たちが好きだから、私は今日もお茶を点てる。